

『農村ワーキングホリデーを通じてみた都市農村交流の「鏡効果」』

和歌山大学 観光学部

藤井至・佐藤光里・辻史朗・横山咲子（農山村再生ゼミナール4年生）



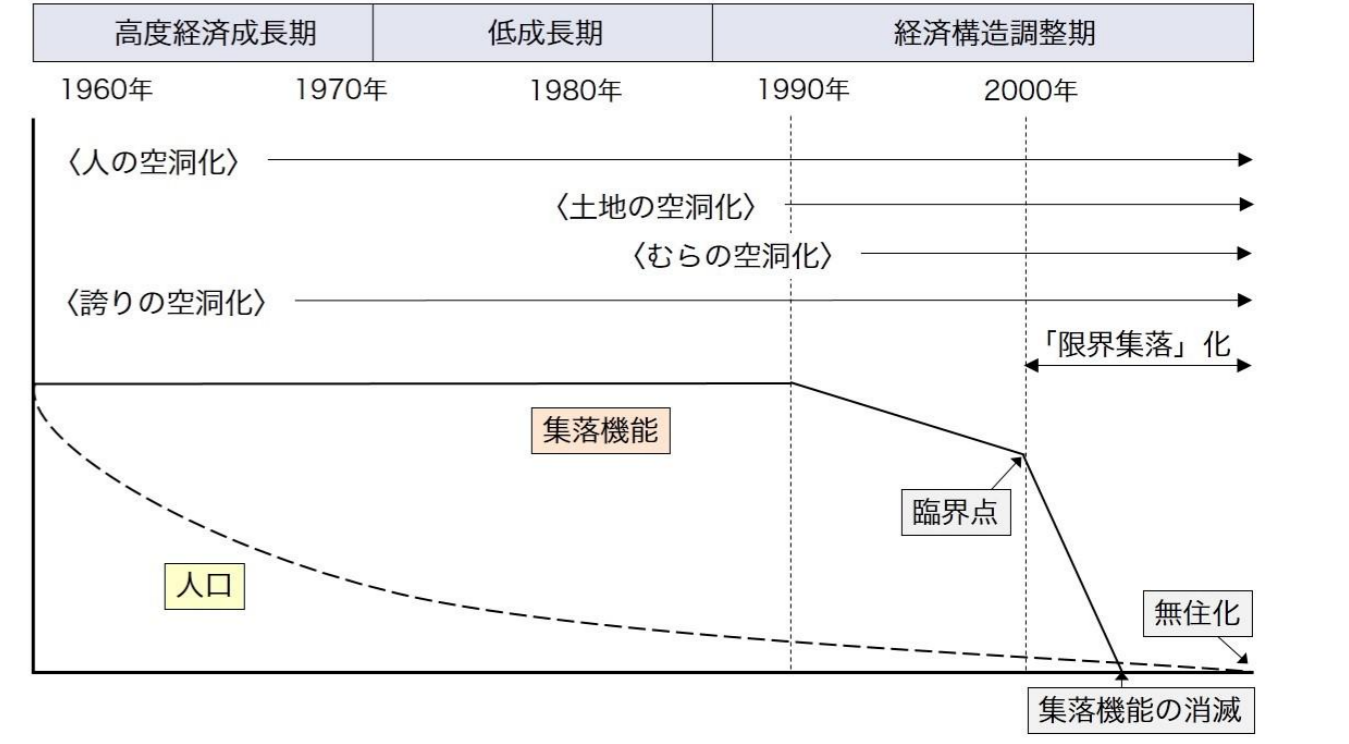
1. 研究目的

近年、都市住民と農村住民が交流することによって互いに地域の価値を見つめ直す都市農村交流が注目を集めている。なかでも、農村ワーキングホリデーは生活と作業を共にすることから農家は都市住民の目を通じて地域の価値を見直す機会を得る（都市農村交流の「鏡効果」）。

本研究では、**大学との協働を契機として、地域が自ら受入組織を立ち上げるに至った岩手県胆江地方の農村ワーキングホリデーの取り組みを事例に、都市農村交流の「鏡効果」について検証した。**

2. 都市農村交流の「鏡効果」

農村から都市への人口流出・人口の自然減少による地域内人口の縮小(人の空洞化)、農林業の担い手不足による耕作放棄、農地潰廃、林地荒廃の進行(土地の空洞化)、寄合回数の減少など集落活動の減少による集落機能の停滞(むらの空洞化)、そして、地域住民がその地域に住み続ける意味や誇りを見失いつつある(誇りの空洞化)など農村は多面的な問題を抱えている。これを小田切は「四つの空洞化」と表現し、これらがある段階になると「限界集落化」が始まるとした。また、この「限界集落化」防止策として重要なのは「誇りの空洞化」の拡大を止め、誇りを取り戻すことであることから、本研究では、都市農村交流に注目した。都市農村交流は農村住民が地域の価値を都市住民の目を通じて見つめ直す効果を持つ。都市住民が「鏡」となり農山村の「宝」を写し出すことから都市農村交流の「鏡効果」という。この効果が、集落機能の衰退・四つの空洞化の進行を止める大きな役割を果たすのである。（参考：小田切徳美『農山村再生 「限界集落」問題を越えて』岩波書店,2009）



3. 農村ワーキングホリデーについて

農村ワーキングホリデーは、農業・農村に関心を持ち田舎暮らしや農作業をしてみたいと希望する都市住民に、繁忙期の地元農家が寝食を無償で提供する仕組みを指す。農家と共に農作業や農村のありのままの生活を体験することから、都市農村交流の「鏡効果」が他の都市農村交流と比べて高い形態である。

農村ワーキングホリデーの先進地である長野県飯田市では、十数年前から取り組まれており、農村ワーキングホリデーの参加を契機に田舎暮らし志向のIターン者や新規就農者が増加するなど農村再生の成果を上げていることから全国的にも注目されている。

4. 研究対象地域：岩手県胆江地方について

岩手県胆江地方は、岩手県の南西部に位置し（奥州市と金ケ崎町）、胆沢川によって開かれた胆沢扇状地が広がり、散居のたたずまいが広がっている地域である。土地の利用状況は、総面積のうち田が17.7%、畑が4.8%を占め、稲作を中心とした農業が展開されている。グリーン・ツーリズムについては、奥州市と平泉町の受入登録農家によって構成された「おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会」が、小・中・高校生を対象とした体験型教育旅行を行っているほか、農家レストランや農村ワーキングホリデーなどさまざまな活動に取り組んでいる。



5. 事例研究：岩手県胆江地方における農村ワーキングホリデー

①岩手県胆江地方農村ワーキングホリデーの詳細

- ◇実施日：2012年9月17日～20日（ワーキングホリデー）
- ◇参加者数：受入農家 5戸 学生（和歌山大学） 9名
- ◇農村ワーキングホリデー全行程（一例）

日時	受入先での行事・仕事	参加学生の作業日誌
9月17日	14:00 県南振興局での受入式	〇初めて被災地に行った。やはり、テレビで見るのとは異なっていた。一年半も経ったのに、かれが山積みで、またその多さに、復興には時間がかかるんだと実感した。
	15:00 陸前高田市、大船渡市訪問	〇ビデオを見せていただいて、話を聞き、農家が抱える問題や、震災の影響を聞くことができた。
	16:00 帰宅・入浴（温泉へ）	
	17:00 夕食	
	18:00 農業関係のビデオ鑑賞	
	19:00 就寝	
	20:00 起床	〇重さを量って、一つずつ袋に詰めた。一本一本重さが違うので、重さを合わせるのが難しかった。
	21:00 ホウレンソウ、小松菜の袋詰め	〇朝から詰めたものを店頭並べた。スーパーの裏口に入るという滅多にできない経験ができた。
	22:00 朝食準備、朝食	〇レタスの種がとも小さく、地道な作業で根気が必要だった。
	23:00 スーパーに出荷	〇稲刈りに使うバレットを洗った。初めは時間がかかっていただけ、途中で慣れてきた。
9月18日	5:00 野菜的の播種	〇コンバインの運転をさせていただいた。とても貴重な経験だった。コンバインで刈れない間を手で刈る作業をした。
	6:00 パレット掃除	〇朝食・夕食と自分が作ったものを、皆さんが美味しく食べて下さるので嬉しかった。
	7:00 朝食準備、朝食	
	8:00 野菜的の播種	
	9:00 パレット掃除	
	10:00 昼食（農家レストラン「まだ来ずた」）	
	11:00 稲刈り（右写真）	
	12:00 買い物、夕食準備	
	13:00 夕食・懇談	
	14:00 就寝	
9月19日	5:00 起床	〇先日もやっただので、作業はかどった。
	6:00 掃除	〇床の掃き掃除をしたり、シートをテープで壁に貼りつけた。
	7:00 小松菜、春菊の袋詰め	〇30kgの米が重くて大変だった。
	8:00 朝食準備、朝食	〇いろいろな農家さんの話が聞けてよかった。
	9:00 スーパーに出荷	
	10:00 脱穀準備	
	11:00 脱穀	
	12:00 昼食（ほたるの宿）	
	13:00 精米、コメの袋詰め	
	14:00 入浴、身支度	
9月20日	15:00 交流会準備（セミナーハウス）	
	16:00 交流会準備（セミナーハウス）	
	17:00 受入農家とWH参加者の交流会（セミナーハウス）	↑交流会の様子（写真）
	18:00 就寝	
	19:00 起床	〇シートがとても大きく大変だった。機会を操作させてもらった。
	20:00 枝豆の収穫	〇2合ずつ袋に詰めた。それを真空にして販売用にする。慣れたら、速く作業が進むようになって、多くの袋ができた。
	21:00 朝食準備、朝食	
	22:00 脱穀準備	
	23:00 コメの袋詰め	
	0:00 昼食準備、昼食	
1:00 帰宅準備、「牛の博物館」へ		
2:00 離村式		

②岩手県胆江地方農村ワーキングホリデーの事後アンケート結果

農村ワーキングホリデー実施後、受入農家を対象にアンケート調査を行った。結果は以下のとおりである。

構成世帯員数	農家A（稲作） 8人	農家B（酪農・稲作） 3人	農家C（稲作・野菜作） 8人	農家D（稲作・野菜作） 2人	農家E（有機野菜作） 4人
生産作物・規模	稲作 1.2ha 切欠 8a トマト 1a	稲作 170a 酪農 搾乳牛25頭 育成牛15頭	稲作 2ha ハウスビーマン 1000本 菌床しいたけ 5400個 枝豆 少々	稲作 約9ha（普通栽培6ha） （自然栽培3ha） 産直用野菜（枝豆など） 約1ha	野菜（無農薬） 90a
1 ワーキングホリデーを受け入れて良かったこと	教育旅行との違いをあらためて感じるいい機会になったと思う。ワーキングホリデーは本当に農村を救うことができると思った。	学生たちとの会話は新鮮でいい刺激を受けた。農山村再生以前に私が再生され少し若返った気がする。	仕事が進んだ。学生との話が楽しかった。	作業が助かりかった。また、朝晩の炊事を任せる事ができたので他の作業をすることができてよかった。家族が増えたので、活気づき家庭が明るくなった。	若いエネルギーで励まされた。何よりも家族が喜び笑顔の毎日だった。
2 今後も学生によるワーキングホリデーの受け入れを続けていきたいか	もちろん。仲間をもっと増やしていきたいと思う。ワーキングホリデーは農村にかなりの影響力があると思う。	継続を希望する。ワーキングホリデーを定着させ、学生や都会の人たちと農業・農村の諸問題を共有認識し、交流を進めていくことが地域再生のまず第一歩だと思う。	続けていこうと思う。学生との交流がいい。	農村再生や農業等に関心のある学生が来てくれることが、それだけでも大助かだと思っている。今後もワーキングホリデーの受け入れを続けていきたい。	喜んで。やはり、励まされるし、自分たちの仕事にも喜びが出てきてやる気が出る。
3 農村再生手法としてのワーキングホリデーの可能性について	大学生は大人の一步前ということ、理解力、創造力、影響力なども可能性が大きいと思う。関わる回数も多いと思うのでお互いにメリットがあると思う。	ワーキングホリデーが即、農村再生手段に結びつけないと、時間をかけて息の長い交流を心がけることから始める必要があると思う。	わからない。	農村再生手段として色々あると思うが、ワーキングホリデーは取り組みやすさ効果もあるのではないかと考える。すでに始めている地域も多いので、この地域ならではの掛けが必要では。	農業全般について学生や仕事のない若者たちの理解を深めていく働きかけの一つとしても大切だとおもうので今後の取り組みで可能性があると考える。
4 ワーキングホリデーを受け入れて改善を要する点	受入側がいかに普通の生活を崩さずに過ごすかが大事だとは思っているがなかなか難しい。	特になし。	受入人数が2人がいいのか、1人がいいのかわからない。	困ったことはなかった。受入側としてそれなりの設備を整えていきたいと思う。	日数が少なかった。特に困ったことはない。

③岩手県胆江地方と和歌山大学との域学協働の歩み

岩手県胆江地方と和歌山大学の取り組みは農村ワーキングホリデーをはじめさまざまな取り組みへと展開している。

年月	岩手県胆江地方と和歌山大学の協働共業内容
2012年5月	岩手県庁に勤務する和歌山大学OBの存在が縁で「事業ありきではない持続的な農村再生の仕組みづくりを大学と一緒に考えよう」と和歌山大学教員と県庁職員・地元農家との話し合いが始まる。
2012年9月	5戸の受け入れ農家と9名の和歌山大学学生の参加で初めての農村ワーキングホリデー（3泊4日）を実施。
2012年12月	農村ワーキングホリデー受け入れ農家をはじめとする農家女性6名が和歌山県に来訪。県内のフィールドスタディに参加し、学生や地域と交流を深める。
2013年3月	農村ワーキングホリデーの効果を広げるべく地元農家を中心となって「農山村再生セミナー」を開催。和歌山大学から教員と参加学生3名がパネリストとして参加し、地元岩手大学、他大教員・学生の参加も得て交流の幅を広げる。
2013年4月	セミナー参加を機に農村ワーキングホリデーに関心を持つ農家があらたに参加し、地域自ら受入組織「胆江農村ワーキングホリデー研究会」を設立。
2013年9月	和歌山大学学生30名が農村ワーキングホリデーに参加。（セミナーなどで交流を深めた他大学生も農村ワーキングホリデーに合流予定。）

6. 考察

- ◇学生との交流が受入農家を活気づけ、自発的な組織形成へのきっかけを与えた。
→地域が自ら受入組織を立ち上げたことをはじめ、「若いエネルギーに励まされた」や「自分自身が若返った気がする」という意見がうかがえた。
- ◇交流による新たなネットワークが創出された。
→受入農家側は継続的な学生によるワーキングホリデーの実施の声が多く、学生側からも深い交流ができて家族の新たな一員になったという意見があった。
- ◇次世代を担う人材の育成の場となる。
→農業・農村について理解を深めるきっかけとなり、いずれは農村を支える人材を生み出す可能性があると考えられる。

農村ワーキングホリデーは、都市農村交流の「鏡効果」の最も高い形態の農山村再生手法であることが確認できた。また、新たなネットワークや信頼関係の構築・次世代の人材育成という多面的な効果も有しているため、今後も継続的な活動が望まれる。



7. その後の地域の動き

2013.03.09
農山村再生
セミナー開催

和歌山大学の学生と教員がパネリストとして参加し、意見交換を行いました。

新聞記事：
2013.03.10
岩手日日新聞



8. 今後の課題

今回の調査結果から、農村ワーキングホリデーが都市農村交流の「鏡効果」の最も高い形態であることが確認できた。しかし実際のところ地域農業やコミュニティなどにどれほどの影響を与えているのか、今後もより踏み込んだ調査を長期的に行い、定量的な視点からも検証していくことが必要である。